

日本文学部会

【概要】

ギユモ オリアンヌ*

はじめに

第16回国際日本学コンソーシアム日本文学部会は、2021年11月6日午前に開催された。大学院生の2名と大学教員2名の研究発表が「世界と日本：融合する文化」というテーマのもと行われた。以下、それぞれの発表内容と質疑応答の概要をまとめた。

1. 趙雪（北京外国語大学・日本学研究センター院生） 「唐風和月—阿倍仲麻呂と唐詩人の交友関係—」

趙氏は、清・康熙帝の勅命により唐代の詩を網羅した『全唐詩』を取り上げ、唐の一流詩人たちが阿倍仲麻呂と交友関係にあったことを論じた。阿倍仲麻呂自身の1編を含め、詩人たちと仲麻呂の関係を表す『全唐詩』中の詩5編を丁寧に読み解いた。仲麻呂が帰国のために出立する前後に詠まれたこれらの唐詩からは、仲麻呂と詩人たちとの間に親しい関係があったことに加えて、趙驊、李白などの唐の一流詩人たちの仲麻呂に対する高い評価がわかったと結論づけた。

質疑応答では、漢詩の読み下しの問題に関する質問があった。

2. 徐梅婷（北京外国語大学・日本学研究センター院生） 「永井荷風の日本文明批評—その江戸文明傾斜を中心に—」

徐氏は、近代日本を生きた小説家・知識人である永井荷風の日本文明批評の活動を考察して、文明批評の一環と捉え、江戸時代文明を取り上げた荷風の先駆性及び限界を論じた。徐氏は、荷風がアメリカとフランスでの体験を元にした『ふらんす物語』『新婦朝者日記』などを取り上げ、西洋体験が、距離において日本社会を観察し、批評する力を、荷風に与えたことを指摘した。近代日本文化の基盤として、東洋的・アジア的文化風土に根ざして成長してきた民衆文化に着目し、その具体的実態を江戸時代の文明に求めて評価した点に荷風の独自性があると論じた。徐氏は、単に荷風の主張と行動を解明するだけでなく、同時代との関わりを考察して、文学者であるとともに文明批評家でもある荷風の独自性と限界を指摘して、その位置付けを明らかにし、荷風の文明批評は時代を先取りしており、「後ろ向きの先駆者」の姿勢が見られると結論した。

質疑応答では西欧文化を賛美する荷風の志向と、『江戸芸術論』における江戸文明への傾斜は、どういう関係になっているのかという質問が寄せられた。荷風のオリジナルな立場をより明確にするための再確認が行われた。

*お茶の水女子大学・院生

3. 浅田徹（お茶の水女子大学教員） 「ヨーロッパ現代音楽における日本古典文学に 取材した作品について」

浅田徹先生は、日本古典文学に取材した作曲家の作品を取り上げ、日本の古典文学がどれほど世界の音楽文化に影響を与えたのかを検討した。

対象とするのはヨーロッパを中心とし、近年まで活躍していた作曲家の、概ね1980年以降の作品であった。日本の古典文学作品に取材した作品91曲中、75曲が「俳句」（俳諧・発句）に基づくことを明らかにした。ジャポニズムの時代から注目されていたのは「俳句」と短歌（和歌）であったが、現在に至ってもなお、日本の古典文学で世界の音楽文化に最も豊かな貢献をしているのは「俳句」であり、その数は増え続けていることが分かると考察した。また、地域的には、ジャポニズムと深い関係を持っているフランスで特に多く見られたが、作例は諸国に分布して、十分に広い地域での享受が認められると指摘した。

質疑応答では、俳句はすでに日本限定でなく、世界的な文学ジャンルであるが、日本人以外の作者の俳句を使用した曲はどのくらいあったのかなど、データの作成に関わる質問が寄せられた。

4. 范淑文（台湾大学・日本語文学科教員） 「日本文学は誰のものか—芥川賞受賞作にみる ボーダーレス—」

2021年7月に第165回芥川龍之介賞が発表され、台湾出身の作家、李琴峰の『彼岸花が咲く島』が受賞作に選ばれた。初めて台湾出身である作者が芥川賞を受賞した。范淑文先生は、日本語を母語としない李さんの文学創作の意義、また受賞作『彼岸花が咲く島』の創作における言語の使用やキャラクター作りの工夫、さらに作品に歴史を織り込んだことなどを論じた。「ボーダーレス」という言葉を巡って、文化の交流や融合がどのよう

に図られ、それによって如何なる効果が果たされたかを検討している。日本語と「華語」や台湾語を混ぜて虚構の言葉を作り出したことや字実と島民の交流に障壁がないことを一種の言語の「ボーダーレス」と捉えた。芥川賞の候補作に選ばれた温又柔の『真ん中の子どもたち』に引き続き、日本在住歴がまだ浅い非日本語母語話者の李琴峰による『彼岸花が咲く島』の受賞は、第一に、日本文学の創作のボーダーレスを意味しているとみなしても差し支えがないと結論した。

質疑応答では「ボーダーレス」とはどのような現象であるのか、言語間の「伝達（不）可能性」と、ボーダーレスという概念とはどのように両立可能であるかが議論された。

終わりに

以上、日本文学部会における研究発表についてまとめた。今回の日本文学部会は、時代は奈良時代から現代文学まで、内容もアジアからヨーロッパまで幅広く取り上げられ、大変充実した構成となった。また、さまざまな観点からの質疑や意見交換が行われ、大変有意義な会であった。参加者の皆様に厚く御礼を申し上げたい。